

御嶽海関脇で三度目の優勝  
大相撲初場所観戦雑記

横綱昇進以降二場所連続優勝している照ノ富士が三場所連続優勝を達成すれば太刀山・栃木山以来の快挙との報道が主流の初日前後。どちらかと言えば達成される可能性が強いことを思わせるような報道内容で、テレビ観戦のお客さんの殆どは「どうせまた照ノ富士じゃないの?」と。番付表を眺めてみると、若手力士の台頭が目立ち、少しずつ時代の動きを感じる風景になってはきた。この中から誰かが抜け出してくる日が楽しみではあるが、まだもう少し時間が必要かもしれない。

◆序盤（初日から五日目まで）

貴景勝が序盤で早くも怪我で休場、正代も迷走が始まり、ここまでで全勝と1敗の力士は8人だけになってしまい、しかもその中で6人が平幕力士という状況。

「横綱がひとりだけ」「まともな大関がない」「その後続く者がいない」という相撲協会が抱える三大課題を見事に表わした成績分布（下表：五日目終了時点）になった。

	横綱	大関	関脇	小結	平幕
全勝	照ノ富士		御嶽海		阿炎、
1敗					玉鷲、阿武咲、宝富士、妙義龍、千代丸

照ノ富士は、相手に相撲を取らせておいてから自分の攻めに入るといって、落ち着いた相撲ぶりが目立ち、やはり下馬評通りかと思わせたが、細かく観察すると膝の曲り具合がやや良くないように感じた。御嶽海は、立ち合いから休むことなく前進圧力をかけ続けながら手数を出していくという相撲が目立った。これに加え、多少不利な体勢になりかかっても慌てたり投げ出したりせずに前進を続けていくという冷静さも目立ったが、「いつかは崩れるだろう」という不安感はいつも頭の片隅にあった。平幕力士の中では、先場所活躍した阿炎が伸びやかな突き押しに足の運びが加わり、さらに土俵際で一腰落とすという技を身に付けてきたようで、確実に白星を稼いでいた。玉鷲と並んで、「決して侮れない突き押し相撲」という雰囲気漂わせていた。

◆中盤（六日目から十日目まで）

中盤に入ると少しばかり景色が変わってきた。

六日目、幕内最高齢の玉鷲が照ノ富士を撃沈。長身でしかも腕が長い玉鷲が矢継ぎ早に繰り出すのどわを交えた烈しい攻めに、照ノ富士はあっという間に体が伸び上がり、土俵際に押し込まれた。

新しい力の台頭の中で、宝富士・玉鷲などのベテランが力を発揮しているのは見えても面白い。特に玉鷲は37才、体の張り、肌の色つや、前進を基調とした相撲の若々しさなど目を見張るものがある。トップに躍り出た御嶽海、ことによると・・・と思わせたのだが、十日目にその夢は破れた。

北勝富士の猛烈なおっつけと押し上げに屈してしまい、ついに全勝力士が消えてしまった。北勝富士の猛烈なライバル意識に打つ手がなかったという表現がピッタリだった。低い腰の構えから繰り出す力強く押し上げるようなおっつけは白鵬でさえも手に負えなかった破壊力がある。

これまでの場所のように、御嶽海はずるずると後退するのだろうかという不安が過ぎり始めた。

	横綱	大関	関脇	小結	平幕
全勝					
1敗	照ノ富士		御嶽海		
2敗					阿炎、宝富士、
3敗					玉鷲、琴ノ若、琴恵光、王鵬

◆終盤（十一日目から千秋楽まで）

照ノ富士と御嶽海の対決という図式になるかと思えたが、ぴったりと食いついて離れない阿炎。阿炎の伸び上がるような突き押しは胸から下が無防備になる瞬間が多い。そこを突くことができる、重心が低くスピードの速い相撲がとれる力士には勝機はある。結果として阿武咲・豊昇龍に敗れて二敗になり、十三日目には2敗同士の対決となった御嶽海戦で3敗に後退した。

六日目に玉鷲に敗れた照ノ富士は、その後も安定した取り口で白星を重ねたが、十日目に明生の鋭いおっつけとスピードのある寄り身に屈した。相手に充分相撲を取らせながら自分の攻めに転じる横綱相撲を会得したかと思えたが、序盤で気になった膝の曲り具合はさらに悪くなって、限界が近づいているように見えた。

御嶽海は十二日目になって阿武咲の鋭い出足に対処する間もなく破れ、やはり・・・もしかして・・・と不安になった人は少なくない。これまでの場所だとこのあたりから崩れていくのだが、今場所はそうではなかった。勝負師の顔つきになってきた表情がそれを物語っていた。今場所の番付では御嶽海より上には照ノ富士しか存在しないので、ここで崩れるようでは力がないことを示すようなもの。そして千秋楽、一差で追う照ノ富士に快勝し三度目の優勝賜杯を手にし、大関昇進もほぼ手中にした。立ち合いの突進力、続ける前進圧力、休みなく繰り出される攻めが光り、攻められる局面があっても慌てることなく、引きや叩きに頼ることなく圧力でこれを制していた。御嶽海優勝の基はこれに尽きるような気がするが、問題はこれからで来場所以降もこういう相撲を続けられるかどうかにかかっている。一意専心今場所の相撲を今後も貫いて、弱い大関にならず横綱を目指せる大関になってもらいたいものだ。

	1敗	2敗	3敗
10日目	照ノ富士、御嶽海	阿炎、宝富士	玉鷲、琴ノ若、琴恵光、王鵬
11日目	照ノ富士、御嶽海	阿炎	宝富士、琴ノ若、琴恵光
12日目		照ノ富士、御嶽海、阿炎	琴ノ若
13日目		照ノ富士、御嶽海	阿炎、琴ノ若
14日目		御嶽海	照ノ富士、阿炎、琴ノ若
千秋楽		御嶽海	阿炎

◆御嶽海の実績をどう評価するか

御嶽海は平成28年11月場所に新小結に昇進し、そこから数えて31場所中平幕に落ちたのは3場所だけという三役定着率が極めて高い力士である。

しかも31場所中に関脇の地位で幕内最高優勝を三度も成し遂げている。（今回を含む）

押し相撲ができて、四つ相撲も出来る、おっつけやはず押しは理に叶うもので、体の寄せ方や腰の構え方も悪くないし、投げに拘らないのも良い。相撲の基本が身に付いている感じがする力士である。

三役からの陥落が少ないのは、負け越し場所が少ないことと、大負けしないので落ちてもすぐに復帰できたことによると思う。にも関わらずこれ以上の地位に昇進出来なかったのはなぜか。

つまり、優勝できるような好成績をたまに上げることがあるが持続することが少なく、8勝7敗や9勝6敗の成績が多かったということである。

今場所から遡った直前三場所の成績は33勝12敗（勝率=0.733）だが、直前6場所となると59勝31敗（勝率=0.656）となり、さらに一年遡り12場所になると113勝67敗（勝率=0.628）になる。また6場所毎の勝ち星も50勝～54勝を上げており、大きく落ち込むことはないが、60勝以上あげることもない。これらの実績をもって、大関という地位に昇進して職責を果たせるのか、また横綱を狙うような力士になり得るのか、現時点では何ともコメントのしようがない力士でもある。

この先、御嶽海自身がどのように身を転じて磨いていくのかにかかっているような気がする。

◆御嶽海の成績（赤字＝幕内優勝）・・・平成28年11月（新小結）以降の実績

場 所	地 位	成 績	直前三場所	六場所	
平成28年11月	東小結	6勝9敗			新小結昇進後 31場所中 三役 28場所 内関脇 18場所 小結 10場所  277勝185敗 3休 勝率=0.596
平成29年1月	西前頭1	11勝4敗		54勝36敗	
平成29年3月	東小結	9勝6敗		勝率0.600	
平成29年5月	東小結	8勝7敗			
平成29年7月	西関脇	9勝6敗			
平成29年9月	東関脇	8勝7敗			
平成29年11月	東関脇	9勝6敗			
平成30年1月	東関脇	8勝7敗		53勝37敗	
平成30年3月	東関脇	7勝8敗		勝率0.589	
平成30年5月	東小結	9勝6敗			
平成30年7月	西関脇	13勝2敗			
平成30年9月	東関脇	9勝6敗			
平成30年11月	東関脇	7勝8敗			
平成31年1月	西小結	8勝4敗3休		51勝36敗	
平成31年3月	東小結	7勝8敗		3休	
令和元年5月	西小結	9勝6敗		勝率0.567	
令和元年7月	東関脇	9勝6敗			
令和元年9月	東関脇	12勝3敗			
令和元年11月	東関脇	6勝9敗			
令和2年1月	西前頭2	7勝8敗		54勝36敗	
令和2年3月	西前頭3	10勝5敗		勝率0.600	
令和2年7月	西関脇	11勝4敗			
令和2年9月	西関脇	9勝6敗			
令和2年11月	東関脇	8勝7敗			
令和3年1月	西小結	9勝6敗			
令和3年3月	西小結	8勝7敗		59勝31敗	
令和3年5月	東小結	10勝5敗		勝率0.656	
令和3年7月	西関脇	8勝7敗			
令和3年9月	東関脇	9勝6敗	33勝12敗	勝率0.733	
令和3年11月	東関脇	11勝4敗			
令和4年1月	東関脇	13勝2敗			